2023年 いわて高校生学び応援プロジェクト 小論文コンクールは「発」をテーマとし、応募総数は55編でした。応募いただいたみなさん、ありがとうございました。

日本では、小学校のうちは読書感想文などで文章を書く機会がありますが、中学、高校と進むにしたがってまとまった文章を書く機会が減ります。また、スマートフォンやSNSが普及して、メッセージの内容も形式も話し言葉とあまり変わらないものになってきました。ところが、高校卒業間近になると、入試や就職試験の小論文、志望理由書などが必要になりますし、大学進学後や社会人になってからは、レポートや卒業論文、ビジネス文書、挨拶状など、正式な文章を書く機会にあふれています。

本コンクールは、県内高校生のみなさんが書くことへの苦手意識を克服し、書くことの面白さを実感してもらう機会を提供するものです。文章をまとめるというのは、決して楽な作業ではありません。しかし、それは大学や社会の中で必要な作業であるだけでなく、その作業を通じて自分の考えを形づくるという大切な働きも持っています。

今回応募してくれたみなさんは、自分自身との対話を繰り返すことで、自分の考えが文章という見える形に発展したことに気づいたと思います。そこには達成感があります。よりよいコミュニケーションのため、そして自分自身の成長のため、みなさんがこれからも文章を書き続けてくれることを願っています。

2023 年、いわて高校生小論文コンクール 講評

作品の評価にあたっては次の 4 つの観点に着目した。

⑴ 与えられたテーマ「発」に沿って、自分なりに論点（小テーマ）を立てているか。
⑵ 表記、文章表現、文章構成は的確か。
⑶ 自分自身の経験、感性、思考に基づいた論述となっているか。この点では、自身の生活体験に根ざした論述であることが望ましい。
⑷ 論理的に分析や提言をしているか。

⑴ 与えられたテーマ「発」に沿って、じぶんなりに論点（小テーマ）を立てているか。

今回のテーマ「発」から完全に外れた作品はなかった。しかし、例えば、SNS やソーシャルメディアでの発言の問題（個人攻撃、「炎上」騒ぎ、名誉毀損など）を論じる場合、「発」というテーマから、「発信」や「発言」へと論点の絞り込みをしていることを説明しないと、読者に対して親切な叙述にはならない。全体を読み終わってから「この小論文は、『発』→『発信』→ソーシャルメディア、と発想しているのかな」と、読者が論理を再構成しなくてはならないからである。

⑵ 表記、文章表現、文章構成は的確か。

表記については、全体としてよくできていた。誤字脱字、誤変換などは少なかったように思う。今回から、すべて PC 入力としたので、手書きの薄い文字などなくなって読みやすくなった。しかし、進学や就職のための試験では当面は手書きのままであろう。そのため、ノートを取ったり手紙を書いたり、日常で手書きの機会をもつことも必要である。

文章表現については、「ら抜き言葉」など口語的な表現が混じったり、主語と述語が呼応していないといった例は若干あったものの、一読して意味の分からないような文はなく、全体としてよくできていた。あえて言えば、一文を短めに終わるよう意識した方がよいであろう。長くても 3 行くらいであろうか。文が長くなると読みづらくなりがちだし、主語と述語が呼応していない、いわゆるねじれた文にもなりやすい。

ところで、文章表現を工夫するときに一般論として言えることは、形容詞や副詞をできるだけ使わず、それを具体的な叙述で表すことである。子どもが感想を聞かれたときに「楽しかったです」「よかったです」といった答え方をするのをよく見聞きする。文章として表現する場合には、どのように楽しかったりよかったりしたのか、あるいは「楽しい」や「よい」と言わずに楽しいことやよいことを読み手に伝えるにはどう書けば効果的かを考えよう。

文章構成については、とりあえずは段落分けを意識するとよい。段落は内容的に一つのまとまりを持っている。どこからどこまでを一つの段落とし、前後の段落とどういう関係にあるのか（順接、逆接、例示など）をよく考えながら書こう。そうすることで、文章全体の論理構成が明確になってくる。段落が多すぎて段落分けの意味がほとんどなくなっている作品も見られたので、注意してほしい。1,200 字ならば、4〜6 くらいの段落構成が適切であろう。また、論理的な文章を書くことに慣れないうちは、「したがって」「または」「しかし」「なぜなら」のような接続詞、「それ」「これ」「前者」「後者」「一方」「他方」「第一に」「第二に」のような指示や順序を示す語句を意識し、多用すると論理的な文章になりやす

い。もっとも、　新聞の記事や社説を読んでみると、このような語句の使用は意外に少ない。つまり簡潔で読みやすい文章は、論理の流れがすんなりと頭に入ってくるので、接続詞や指示語を減らすことができるのである。

段落の話が出たところで、余談にはなるがパラグラフ（段落）ライティングについて言及しておこう。パラグラフライティングとは、パラグラフ（内容的に一つのまとまりをもった文の集まり）の最初に、そのパラグラフ全体を代表するような重要な一文を持ってくるべきという考え方である。これは欧米での作文教育で強調される概念で、日本でも大学でレポートや論文を書くときには、これを意識して執筆するように指導されることもある。各パラグラフ（段落）の最初の一文を抜き出すと全体の要約ができてしまう。書き手と読み手双方にとって、論理が明確になって理解しやすい。この「講評」もまたパラグラフライティングを意識して書かれている。

しかし、文章といってもさまざまな文体、形式がある。文学作品、手紙、日記などは一般的にはパラグラフライティングの考え方では書かれていない。では「小論文」はどうなのか。実は決まりがない。論文やレポートに近い論理的な文章を書くことが求められているときには、パラグラフライティングの考え方は有効だし、文芸・文学的な文章が求められていると思えば、随筆のような起承転結の構成にしたり、経験や想像の世界をふくらませて書くこともあり得る。

最後に、論述字数について一言。この小論文コンクールの場合は、字数が少なくても内容で評価されることはある。だが、試験の小論文の場合は、字数が少ないだけで失格となることもあるので注意しよう。最少でも制限字数の 8 割、できれば 9 割以上は書くべきである。

⑶ 自分自身の経験、感性、思考に基づいた論述となっているか。この点では、自身の生活体験に根ざした論述であることが望ましい。

毎年のことだが、⑶で大きな差が出ている。文章でもスピーチや会話でも、その人独自の事例を取り上げた方が、読む人、聞く人は関心を持つ。事例と描写で独自性を出す方が、⑷の論理や主張で独自性を出すより容易である。なお、テレビや新聞でしばしば使われる「ストックフレーズ」（出来合いの文や言葉）を安易に使うのは避けたい。そうしたフレーズが、自らの生活実感や体験に照らして適切な表現なのかを立ち止まって考え、吟味してみよう。誰もが知っているフレーズというものは、実は誰にも訴えかける力がないのかもしれない。独自の事例がなく、だれでも知っている事例を使って論じる場合は、⑷がより重要になる。

⑷ 論理的に分析や提言をしているか。

論文やレポートでは必須である。ことに 1,200 字という限られた字数のこの小論文コンクールの場合、論点を一つに絞って論証することが必要である。いくつもの論点を取り上げては散漫な文章になってしまう。また、⑶で独自な事例を取り上げ、描写に工夫を凝らしたとしても、ただ叙述するだけでは作文とは言えても小論文とは呼べない。論点を一つに絞り込んで、根拠を示し、反論も想定しながら思考を深めて行くべきである。

以下で、応募作品を具体的に講評する。

漢和辞典を開いてみると、「発」には意外に多くの意味があることがわかるが、大きくは次の 5 つである。

① 放つ（発射など）。

② 外へ出る、出す、現れる（発芽、発掘、発揮、発見など）。

③ 起こる、起こす（発起、発病、発明など）。

④ 明らかにする（啓発など）。

⑤ 進む、動く（発車など）。　　（参考『三省堂 漢和辞典 第四版』三省堂、1990 年）

全 55 編の作品を見渡すと、「発信」や「発話」などから、コミュニケーションのあり方を論じるものが多かった。高校生の最大の関心が人間関係にあることの証かもしれない。しかし、ユニークな小論文を書こうと思えば、人が書きそうなものを想定して、それとは異なる論点なり事例なりを取り上げた方がよいだろう。小論文を書くときには、ただ論理的に明確な文章を書くことだけではなく、イメージの広がりや独自の視点もまた重要になる場合がある。

自分なりに具体例をあげて「発」を説明したうえで、さらにその概念を広げたり、深化させたりできた作品がよい作品として選ばれたといえよう。

以下では、今回の入賞作品 7 編についてひと言ずつふれる。なお、優秀賞の 2 作品と佳作の 4 作品に付されている番号は評価の順とは関わりない。

作品(1)（最優秀賞）　発見する喜び

この作品では、登校中の小さな発見についての描写が生きている。また、結論にあたる「情報があふれているこの世の中で、『受け手』になるのではなく、自分から発見できる人であり続けたい」という主張が共感を呼ぶ。単なる文章力の巧拙を越えて、自分で歩き、考え、表現するという、人としての基本的な営みが表現されているように思える。

登下校中にいろんなものに目を引かれて道草した、というのはおそらく多くの人々が遠い記憶としてもっている。成長するに従って機会は減るものの、発見したり、疑問をもったり、考えたりということの大切さは、いつまでも減りはしない。サイバー空間に漂う時間が増えている今だからこそ、リアルな自然や人間との関わりの中で思索することが重要になっている。

作品(2)（優秀賞）　発から始まる真の世界

この作品は、「発露」という論点（小テーマ）がユニークで、論理や主張が明快である。「忖度」ではなく真意・真情の「発露」が必要だという主張である。一面では確かに正しいが、違った視点からも見ることができる。政治家や官僚の「忖度」が問題となったのは、パブリック（公共）な場においては、物事は公明正大に遂行されるべきだからである。

しかし、プライベート（私的）な場ではどうだろう。例えば、家族の一人が間違ったことをしたとする。本人が間違いに気づいていないのなら、はっきりと指摘することが必要であろう。だが、間違いをわかっていても行ってしまう場合、なぜそうなってしまうか心情を理解することが必要だし、場合によっては間違いを受け止め、許す必要があるかもしれない。

日本社会では、私的場の論理が公的な場でも流通してしまうことに問題があるのではないか。

作品⑶（優秀賞）　「発」から考える過程の大切さ

弓道において矢を放つこと（「発」）を結果とみなし、そこに至るまでの過程こそが大切だと主張する作品である。結果が出るかどうかは、運や状況に大きく作用されるのにたいして、「過程」の方は自分の中に蓄積され、次の機会のために活かすことができる。その意味で、弓道は試合の勝ち負けには関係なく、練習・修行は人生を豊かにする。

だが、弓道を人生修養の道と解するならば、なぜ試合で他人と競う必要があるのか。「結果」よりも「過程」の方が大切だとわかっていても、結果を得たいから努力し、過程に工夫を加える。競い合うことが行動の原動力となっているのも真実である。

作品⑷（佳作）　発して強くなる

この作品の論点（「小テーマ」）は作品⑵と近い。作品⑵の「発露」にあたるのが「苦言を言い合える」であろう。野球というチームスポーツの場面で語られているので、イメージが持ちやすい。苦言を言い合える人間関係は、信頼、愛情、目的意識の共有など目に見えない絆で形成されていると言えよう。こういう人間関係のもとでは、苦言を言い合うことがさらに絆を強めるプラスの作用をもたらすことだろう。

「いつも直球勝負で！」といいたいところではあるが、人間関係には濃淡様々な関係がある。関係の濃淡に応じて、コミュニケーションの方法を適切に選ぶことも必要である。

作品⑸（佳作）　過去と今の繋がり

「過去と今の繋がり」という題よりも、「発言の記憶」「発言の戸惑い」などの方が「発」というテーマとの関係が分かりやすい。だが、敢えて「過去と現在の繋がり」としたところに、この作品の筆者にとっての「発言」の重みがあるのかもしれない。

評者も思春期のころ、人前で発言するときには顔が真っ赤になって困ることがあったので、この筆者の抱えていた困難も少しはわかる気がする。この困難は、大勢の人たちの前に立ったときに、自分と他者たちとが断絶しているように感じることからくるのではないか。人々の表情などから、気持ちが通じていることが感じられると、緊張は少しずつ解けていくことだろう。

作品⑹（佳作）　新たな視点を発する

新たな視点で物事を見てみることは確かに大切だ。同じ世界を見ていても、多くの視点で見ることができれば、世界はずっと豊かなものになるだろう。このことは上記作品⑴の「発見する喜び」ともつながっている。

では、どうすれば新たな視点を獲得できるのか。一般的には人は成長するに従って、好奇心が衰えて固定したものの見方をするようになる。その方が情報処理の量が少なくて済むという利点もある。だが、ありふれたたことにも「なぜ？」と問を立ててみる習慣を維持することは重要だ。他方、成長するにつれて知識の量は増えていく。知識は、自分で立てた問に対して仮説推論するときに有効であり、世界を見るのに役立つ。

作品⑺（佳作）　別れと出会い

新しい世界へ「発ちたい」のか「発ちたくない」のか、矛盾した心情が語られている。多くの人はこの

矛盾した心情を抱えているので、共感を覚えることができる。結論から言えば、発った方が良いのである。出会いがあれば必ず別れがあるのが人生だし、世界は変転極まりない。ならば、同じところに止まり続けようとするのではなく、先手を取って旅発って変化を続けた方が良い。

だが、人の心は、川の流れのように流れ去って入れ替わってしまうものではない。自分にとって核となるものを守り育てながら、旅発って挑戦を続けるのが理想だろうか。